

## 11. 言語・伝承

### 11-1 口頭伝承、歌と踊り

オンネチセ onne cise (大きな家) のフチは、サコロベ sakorpe やユーカラ yukar ができた。サコロベなどをやることもヤイラブ yayrap という。(釧路11-3-9参照)

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 11-1-4 楽器演奏

ムックリ (釧路8-8参照) を演奏することを、ムククリ レッテ mukkuri rette という。エタク ネプカ ヤイラブ etak nepka yayrap は、「早く何かムックリでも歌でもやれ」ということ (後に「早く何かしゃべろ」という意味だ、という) (釧路11-3-9参照)

若い頃、秋とか春のカムイノミの時、皆が集まったときに、その中から3人なり4人なり上手な人を選んで演奏させる。歌に合わせてたり、手拍子に合わせてたりしてムックリで伴奏した。

自分は、身体が丈夫になった16、7歳の頃からムックリを始めたが、普通は10~12歳の頃から始める。父がムックリを作ってくれてやってみなさいと言われた。他の3人の兄弟の姉、兄、妹もみなムックリをやる。

父、母、叔父 (福松) のムックリの演奏を伝承して今でもその真似ができる (演奏の録音あり)。父は秋辺姓で (後にイガリモスケという)、母も秋辺姓だ。徹辺フヨはおばにあたる。ムックリの演奏は誰から特別に習うということはない。ムックリをやりたいと思った子供が父に頼んでムックリを作ってもらい、家で父と母の前で父と母の曲を弾くと父や母がそこが違うとか教えてくれた。母親の曲を先に習った。それから父から父の曲を教わった。

母の弟で自分のおじの秋辺福松は、早くに亡くなった人だが、ムックリの演奏が上手だったのでその真似をした。おじの曲は母親の曲に似ているが、曲はそれぞれ演奏者によって少しずつ違う。夜に一人でムックリの練習をした。

ムックリは、息を吸ったり吐いたりしていろいろな音を出すので歌よりも楽だと思う。ムックリの演奏で音が出ないことをハウエウエン hawewen という。ムックリの下手な人を歌の評価と同じようにハウエウエンベ hawewenpe、上手な人をハウエピリカ hawepirka ~ハウピリカ hawpirka という。ムックリの演奏が上手なことをムククリ レッテ ピリカ レッテ mukkuri rette pirka rette という。

若い頃、阿寒でムックリを演奏していたとき金田一京助さんが来て自分の演奏を聞いた。「日川さんは、70種類の音が出せるね」と金田一さんに言われたことがある。

[屈斜路 日川キヨ氏]

ムツクリには、クマの鳴き声、鳥の鳴き声、雨垂れの音、ウポポの囃しの様子などがある。トリの鳴き声はビョービョー鳥という鳥の声だ。エトロ ムツクリ *etor mukkuri* という鼻いびきの音真似もある。(写真図版6～8参照) (演奏の録音あり)。

[屈斜路 日川キヨ氏]

### 11-3 言語資料

#### 11-3-2 色彩名称

赤 フレブ *hurep*

青 (分からない)

黒 クンネブ *kunnep*

白 レタラ *retar*

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 11-3-5 味に関する表現

「(この飴) 甘い」は、ケラ ピリカ *kéra pirka* という。「おいしい」ということだ。「まずい」は、ケラ ウエン *kéra wen* という。「しょっぱい」というのは分からない。ケラ カウワササム *kéra ka uwassam* といえは、「塩気がなくてまずい」ということだ。

匂いはフラツ *hurat* という。ポンフラ *pon hura* はかすかな匂い、オンネフラ *onne hura* はきつい匂いのことだ。ウエンペフラ *wenpe hura* ～ウエンペフラツ *wenpe hurat* ～ウエンペフラブ *wenpe hurap* は、悪い匂いのことだ。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 11-3-8 挨拶の表現

「元気でいますか」と尋ねるとき、ラマク ルクケブ *ramak rukkep* ～ラマク ルクケブペ *ramak rukkeppe* という。「気持ちを大きくしてますか」という意味だ。

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 11-3-9 その他の言語表現

ヤイラブ *yayrap* 「物を言う、おしゃべりする」。ピリカ ヤイラブ *pirka yayrap* 「上手に話す」、ピリカ イタク *pirka itak* 「やさしいことばを言う」、ウエン チャロ コロ 「悪口言う」。

[屈斜路 日川キヨ氏]

ルル rur おつゆ

レラ réra 風

[屈斜路 日川キヨ氏]

#### 11-4 アイヌ語の習得

近所には、私らアウンタリ auntari (アイヌ) よりもシサム sisam のほうが多かった。学校も和人の子と同じだった。家の中でもアウンタリの言葉ではなく、和人の言葉だった。

[屈斜路 日川キヨ氏]